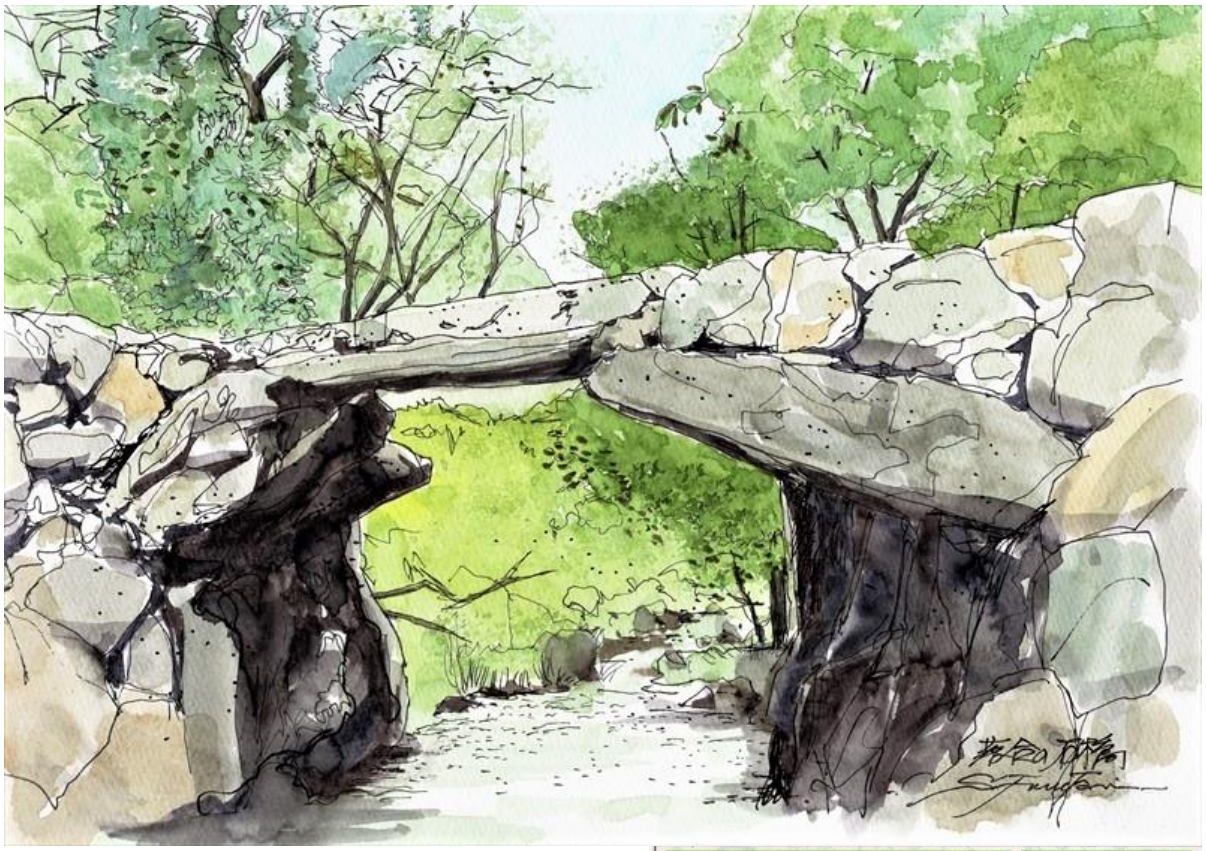
今日のイラスト 342　「 イラストでたどる萩往還⑬　落合の石橋」　　古谷眞之助



萩往還に架かる橋の中で、特殊な構造を持つものの一つが「落合の石橋」で、登録有形文化財に指定されている。山口県によれば、建設されたのは江戸後期のこととされている。となれば、幅僅か 1.7m のこの橋をお殿様も駕籠に乗って通過したことになる。もちろん幕末の松陰先生も高杉、伊藤、山縣らの志士たちも歩いたはずだし、龍馬も間違いなく渡っている、と書くと、へぇーっと思われるかも知れないが、萩育ちの彼らがここを通り、土佐から萩に向かった龍馬がここを通るのは、考えてみれば、ごく当たり前の話である。

長さも幅も大名行列が通るにしてはそれほど大きなものではなく、萩側から歩けば橋の手前に文化財の看板があるので気がつくが、逆に三田尻側から歩けば多くの人が見落としてしまいそうなので注意して欲しい。この橋の特徴である片持ち梁がしっかり分かるように、イラストでは川面から見上げる形の写真をもとに描いている。ちょっと自信がないが、この片持ち梁は左右それぞれ 3 本ずつだったと記憶する。現存するこの形式の橋は私の知る限りでは他に県内に 2 か所あり、その一つは防府市の入川と呼ばれる旧塩田の水路にかかる「桝築らんかん橋」である。こちらは大規模なもので、片持ち梁が 4 本 2 層となっており、長さも 8.8m と 4 倍近くある。もう一つは、右小写真の山口市秋穂二島長浜地区の跳橋である。こちらは防府市のものには劣るが橋脚とも言える立派な土台が作られており、3 本の梁も如何にも強固で、長さは 6m 程度あったと思う。当時にしては高度で丁寧な土木技術が偲ばれる橋と言って良いのではないだろうか。（ 2020.4.25 記 ）

イラストでたどる萩往還 13

落合の石橋

文・イラスト＝古谷眞之助

道を進めば、いつかは川に行き当たるから、当たり前のことだが、萩往還には大小いくつもの橋が架かっていた。最初のものは萩市内橋本川に架かる橋本大橋である。長さは48間、約90メートルで、幅も6メートルある立派な板橋だった。それ以降の主なものは明木橋、佐々並橋、木町橋、鰐石橋、氷上橋と続き、そして防府市の佐波川には、いずれ紹介する予定の舟橋という特殊な橋もあった。

ここ落合の石橋は長さ約2・4メートル、幅1・7メートルの石造りの刎橋で、片持ち梁の役割を持つ柱状の石材の上に玄武岩の3列の板石が渡してある。萩近辺に多く見られる形式だが、萩往還の終点・三田尻の浜方塩田水路にも同形式の橋がある。